

『最愛の幼なじみは掌のなか』

著：松幸かほ

ill：兼守美行

窓からは爽やかな朝の光が入ってきていた。

「はい、これで完璧」

結人のネクタイを結んでくれていた維織が一步離れてバランスを見てから、薄く微笑んで頷く。

「ありがとう、維織ちゃん。良かった、泊まりに来てて」

結人は笑顔で言いながら、維織の部屋の姿見を見てバランス良く締められたネクタイに満足する。

お百度参りをしたあの日から、早十数年。

あの翌日の夜に維織は意識を取り戻した。そして願い通りに結人は維織とたくさん一緒に遊んで成長し、大学を卒業。

今日から社会人一年生である。

「どういたしまして。でも、就職活動の時のネクタイは？」

もったもな疑問を維織は口にする。

「あのときは、ワンタッチネクタイ使ってたから……」

「そうだったんだ。じゃあ、プレゼントするの、ワンタッチネクタイの方が良かったかな」

維織の言葉に結人は頭を横に振る。

「ううん、なんか、ちゃんとしたネクタイって、大人って感じがするから嬉しい」

今日締めてもらったネクタイは、就職祝いに維織がプレゼントしてくれたものだ。

「まあ、練習をしたら、すぐに結べるようになるよ。今日の夜も、ご飯食べにくるでしょ？ その時に練習しよう」

維織はそう言った後、もう一度結人を見て微笑む。

「うん、新しい髪形も決まってる」

「そう？ まだ、何か見慣れなくて落ち着かないけど」

就職活動を終えてから、無精をして、カットを怠っていたので長めの髪の自分を見慣れていたが、さすがに会社員になるのにそれはまずいだろうと短くしたのが一昨日。

少し長めの前髪を軽くワックスで流して固めたものの、ワックスもこれまでは滅多に使わなかったからそれもなんだか落ち着かない。

「大丈夫、すぐに慣れるし、結はいつも可愛いから」

茶化す様子でもなく、さらりと言ってくる維織は、百人いたら百人が「イケメン」と言う美貌

の持ち主だ。切れ長なのにどこか柔らかい印象の目元に、細い鼻梁のすっとした鼻、形のいい唇、とパーツを一つずつ見ても整っている上に、その配置が完璧だと結人は思う。

ネクタイを締めてもらうという至近距離で見ても、全部が綺麗なのだ。

生粋の日本人にしては天然で明るめの髪は、セット前で前髪が無造作に下りているがそれでも十分に格好いいし、きちんとセットされて斜めに流されているときもやっぱり格好いい。つまりところ、いつでも維織は格好いい、というのが結人の結論だ。

対して自分は——いや、比較するのもおこがましいだろう。決して不細工ではないと思うのだが、小さい頃から低い背や華奢な骨格もあって女の子と間違えられがちで、それはこの年になるとさすがに女の子に間違われることはなかったが、「子供っぽい容姿」にすり替わった。

「さて、朝ごはんにしようか」

ひそかに悩める結人にそう言って、維織は先に部屋を出ていく。

その後を追ってダイニングに向かい、結人は一緒に朝食の準備をする。

「維織ちゃん、ご飯どのくらい盛る？」

「普通でいいよ。尚の盛ってやってくれる？ 朝からてんこ盛り食べると思うから多めで」

味噌汁を準備してくれている維織に言われるまま、茶碗にご飯をよそう。

朝食は和食と決まっているわけではない……と思う。昨日の夕食の残り具合で、パンになったりご飯になったり、いろいろだ。

はっきりとしたことが言えないのは、結人がここに住んでいるわけではないからだ。

結人の家は、このマンションから駅を挟んで反対側にあるハイツである。歩いて十分から十五分ほどの距離ということもあり、結人はよく遊びに来ていた。

そもそも、結人が大学に合格した四年前——というかその大学を本命にして受験することを決めた時点で、実家からは通学するのが無理なことは分かっていた。

そんな時に相談できる相手は、維織だった。

維織は結人が行きたいと思っている大学にほど近い大学にすでに進学しており、一人暮らしをしていたからだ。

『合格するかどうかも分かんないんだけど、もし、合格して一人暮らしすることになったら物件探しとか、手伝ってくれる？』

夏休みで帰郷していた維織に相談をしたのは高校二年の時だ。

維織は笑って『もちろん』と快諾してくれた。今、考えてみれば自身の就職活動などもあって忙しい時期だっただろうに、だ。

結人が受験で現地入りした時は、すでに当時維織が住んでいたこのマンションに泊めてもらい、試験後には事前にピックアップ済みだった物件に案内してもらった。

そのうちの 하나가、今も結人が暮らしているハイツだ。

もっと大学に近い物件もあったが、今のハイツに案内してもらった時に、維織が言った、『ここなら、僕のマンションも近いし、何かあったらすぐに駆けつけられて安心だけどね』

という言葉で決めたようなものだ。

そして、これまで、幾度となく維織には世話になってきた。
近い距離にもかかわらず、昨日ここに泊めてもらったのも、
「入社式、寝坊したらどうしよう。緊張して眠れるかな」
と弱気で呟いた結人に、
「じゃあ、泊まりにおいでよ。ちゃんと起こしてあげるから」
と維織が言ってくれたので、あっさり泊まりにきたのだ。
夕食を一緒に食べて、朝、起こしてもらい、そして手間取ったネクタイまで結んでもらって現在、である。

さて、よそったご飯をダイニングテーブルに並べていると、
「うーっす」
体育会系の挨拶をしながら、維織の弟である尚頼がスーツ姿で入ってきた。
尚頼は結人と同学年で、彼も今日から新社会人だ。
幼稚園から高校まで、ずっと同じで、大学だけは離れたが、尚頼もこの近辺の大学に進学し、
維織と一緒にここで暮らしている。

だから余計に結人はここに泊まりにきやすかったりもするのだ。
「おはよう」
「おう、ネクタイちゃんと結べてんじゃん。スーツ姿は七五三だけど」
笑って言う尚頼は、維織より二センチほど背が高く、百八十センチを少し超えたくらいだが、
維織がすらりとしたモデルのような感じなのに対して、尚頼はしっかりと筋肉がついているのが
服の上からでも分かるがっちり体型だ。

決して太っているというわけではないが、恐らくずっとサッカーをしていたから、とにかく
『ガタイがいい』のだ。

百六十半ばで成長が止まったヒョロヒョロ体型の申し子と言ってもいい結人にしてみれば、維
織も尚頼も羨ましいことこの上ない。

「ネクタイは、三回失敗して、維織ちゃんにやってもらった」
素直に告白する結人に、
「おまえ、ホント、泊まりにきといてよかったな？ 朝から半泣きで『ネクタイ締めて！』って
かけこんでくるところだったんじゃない？」

尚頼は言いながら、ダイニングテーブルの自分の席につく。
「本当にそうだったと思う。維織ちゃんがいてくれて本当に良かった」
ちょうど味噌汁を運んできた維織を見て結人は言う。

「どういたしまして。さ、食べようか」
維織はにこりと笑って言い、三人で朝食を食べる。あれこれ喋りながら食べていたせいで意外
と時間がかかり、食べ終わると、入社時刻になった。

「後片付けはいいから、二人とも行っておいで」
慌てる結人に維織が言う。

「でも、維織ちゃんも会社……」

「僕は今日、フレックスにしたから、一時間遅くていいんだ」

さらりと維織は言う。

「じゃあ、兄ちゃんに任せて先行こうぜ」

尚頼は気にする様子もなく、結人に言う。

「う…ん、ごめんね、維織ちゃん。夜ご飯の片付けは俺がするから」

「うん、じゃあ夜は頼むね。二人とも気をつけて行ってらっしゃい」

笑顔で送り出され、結人は尚頼と一緒にマンションを出た。

マンションから駅までは歩いて五分。尚頼とは同じ沿線で降りる駅違いの会社に入社したので、途中まで一緒だ。

「なんか、前に戻ったみてえだな」

駅のホームで電車が来るのを待っていると、尚頼が呟いた。

「前？ 高校の時と違ってこと」

「そ。幼稚園から高校卒業までずっと一緒の学校だったじゃん。俺が朝練ある時も、おまえ一緒に登校してくれてたし」

尚頼の言う通り、放課後はともかくとして、登校だけはずっと一緒だった。理由は特になかったが、尚頼が早く行くなら一緒に行く、という程度のことだ。

尚頼が朝練をしている間、結人は誰もいない教室で維織に勧められた本を読んだり、自習をしたりしていたのを思い出す。

「そういえば、大学の四年間だけだったね、別々に登校してたの」

尚頼も大学はこの辺だったので、その頃から維織と一緒にマンションに住んでいたが、電車通学の結人とは違い、尚頼は自転車で通える距離の大学だったのだ。

「思いがけず長いつきあいになってんなあ……」

しみじみと尚頼が言う。

維織と尚頼に出会ったのは、結人が三年保育の幼稚園の年中に上がったばかりの頃だ。

隣にできた新しい家に引っ越してきたのが、維織と尚頼の家族だった。

「はじめまして、土屋維織です」

引っ越しの挨拶にやってきた維織と初めて会った時、結人は、まるで王子様みたいなお兄ちゃんだ、と、そう思った。

二ヶ月ほど前に四歳になったばかりの結人にとって、小学校三年生だという維織は、とんでもなく「お兄さん」に見えた。

「結くんもご挨拶して？」

母親に促され、結人は母親の後ろに少し隠れるようにして、

「ひぐちゆいとです」

小さな声で名乗る。

「結人くんっていうのね。はじめまして、今日からお隣に住む土屋です」

土屋母は少し背をかがめて結人を見る。

「うちの下の子と同じくらいかしら。この子の下にもう一人いるんですけど、父親と一緒に挨拶まわりに行ってくれて。もうすぐ五歳になるんです」

「下のお子さんは五歳なんですか？　じゃあ、東幼稚園の年中さんに？」

「ええ、そうなんです」

「うちの子も東幼稚園の年中なんですよ。三月生まれだから、おちびさんですけど」

「あら、そうなんです。うちのは五月生まれで、来週五歳になるですよ」

「ほぼ一年違いますねえ」

引っ越しの挨拶にきた土屋家の母親と、結人の母親が、同級生になる尚頼と結人のことをきっかけに話しこみ始めた。

結人は母親の後ろから、ちらちらと維織を見る。維織はそんな結人に微笑みかけてきて、結人はどうしていいか分からなくて、とりあえず手を小さく振った。

その時、

「おかーさん、あっちのごあいさつ、ぜんぶおわったよ！」

家の外から声が聞こえ、玄関に走り寄って来る足音が聞こえた。

やってきたのは結人と同年代だが、はるかに大きく、健康そうな男の子だった。

「あら、もう終わったの？　あ、これが下の子で尚頼です」

土屋母が尚頼を紹介するのに、結人の母親が笑顔を見せた。

「尚頼くんっていうのね。はじめまして、これからお隣さんになる樋口です。うちの結人と同じ幼稚園だから、よろしくね。結人、尚頼くんにもご挨拶して？」

母親に前に押し出されながら言われ、結人は、

「ゆいとです……」

名前だけ言う。

「おれ、なおより。にーちゃんは、いおりってゆーの。ゆいとくん、なんさい？」

「よんさい」

「おれも！　でも、らいしゅうござい！」

嬉しそうに言うと、尚頼は、

「ゆいとくん、あそぶ？　おれ、いえにかえったら、にーちゃんとゲームすんの。いっしょにあそぼ！」

突然そう誘ってきて、結人は戸惑って母親を見上げた。

「あら、誘ってくれてありがとう」

母親は尚頼にそう言ってから、土屋母に顔を向ける。

「もう、荷物の整理は？」

「もう少し、残ってるんですけど、尚頼が退屈してきちゃって」

土屋母は苦笑いをする。

その表情だけでいろいろ察し、

「じゃあ、うちで遊んだらどう？ よかったら維織くんも一緒に」

結人の母親が提案すると、尚頼は「あそぶ！」と喜び「いえにかえってゲームとってくる！」と走っていく。それに、維織はちらりと自分の母親を見て目配せをし合ってから、尚頼の後を追った。

色々しでかしかねない尚頼のお目付け役が維織なのだろう。

それからほどなく、ボードゲームを抱えた尚頼と維織が戻って来て、三人でそのゲームで遊んだ。

結人は初めて遊ぶゲームだったので、ルールなどは何も分からなかったが、維織がほぼ付きっきりで、優しく教えてくれた。

結人は一人っ子というわけではなく、健也という兄がいる。だが、十三も年が離れているので、感覚的には兄というより「保護者」で、「小さなお父さん」といった方が近い。

なので、少し年上の「お兄さん」である維織は結人にとって、新鮮だった。

尚頼とは、クラスが違ったが、同じ幼稚園に通うお隣さんということで、通うのも一緒なら、帰ってからもずっと一緒に遊んでいた。小学校から維織が帰ってくれば、維織を中心に三人で一緒にいて、ほぼ三人兄弟のようにして育ってきた。

優しくて面倒見のいい、憧れの「お兄ちゃん」だった維織は、今でも結人の中では絶対的な存在だ。

だが、いつの頃からか結人は自分の中に、維織に対して「それ以上」の感情があることに気づいていた。

いわゆる「恋愛感情」である。

気づいたのは、中学二年の秋だ。

四つ上の維織は高校三年生で、大学受験を控えていたが、結人たちにとっては、やっぱり「いいお兄ちゃん」で、勉強の分からないところを教えてくれていた。

その時も、二学期の中間試験前で、苦手な数学を教えてもらっていた。教えてもらって、理解できたかどうか参考書の問題をやってみて、と言われて解いている間、維織も自分の受験勉強をしていた。

その時、維織が開いた参考書から、封筒が落ちたのだ。

柔らかなピンクの花柄で、四隅に金色の縁飾りがあった。

『土屋維織様』

丸みを帯びた文字であて名書きされていた。

「維織ちゃん、落ちたよ」

拾って渡す。維織も気にした様子はなく、ありがとう、と言って受け取った。

その時はそれだけで済んだのに、家に帰って思い返して、あれはどう見ても「ラブレター」というものだ、と認識した途端、ものすごく嫌な気持ちになった。

嫌な気持ちというか、具体的には、喪失感や不安だ。

維織に恋人ができれば。

いや、もしかしたら、すでに維織にはそういう存在がいるかもしれない。

維織がモテるのは知っていた。

バレンタインに貰ってくるチョコレートの数が尋常じゃないのだ。

正直、普通の学生で「両手にチョコレートがいっぱい入った紙袋を持って帰って来る」などというモテの猛者は、そうそういるものじゃないと思う。

だが、そのことと「維織が誰かとつきあう」ということが、結人の中ではこれまでイコールで結ばれることはなかった。

なぜなら、維織にはそんな気配が全くなかったからだ。

チョコレートも「くれた子には悪いけど、食べきれないから、いくつか持って帰って」とおすそ分けをしてくれていたし、結人や尚頼が出かける時には、よっぽどの時以外是一緒に来てくれていて、デートなんてしている様子はなかった。

——でも、学校の人とかだったら、休みの日に会わなくても学校で会えるし……。

結人が知らないだけで、維織には好きな人がいるのかもしれない。

漫画にあるみたいに、電車の時間を合わせて登校したり、下校途中にデートをしたりしてるかもしれない。

そう思うと、自分でもびっくりするくらいに胸が痛くて、泣きたくなった。

どうしてそんな気持ちになるのか、その時は分からなかった。

ただ、しばらくして、尚頼に「彼女ができた」と告白された時には、全然胸が痛まなくて、むしろ「おめでとう」とすんなり思えて——その時に、もしかしたら自分は維織に対して、恋愛感情を持っているんじゃないかと、思った。

そう思えば、維織に彼女がいるかもしれない、ということで泣きたくなった理由も腑に落ちた。

腑に落ちたとはいえ、そんなことは言えるはずもなかったし、その年の春には維織は大学進学のために家を出て一人暮らしを始めたので、接点はかなり減った。

会えないのは寂しかったし、きっと大学にも、街にも、綺麗な人はたくさんいて、維織にも恋人ができたりするんだろうなと思うとつらかった。

だが、維織を好きだ、などということは知られていい部類のことではないから、会えない分、悟られずに済むとも思っていた。

それでも、維織は折りに触れて帰って来て遊んでくれた。

夏休みや冬休みといった長期の休みにはほぼずっと実家に戻って、勉強を見てくれたり遊んでくれたりした。

その時に何気なく、

「維織ちゃんは、彼女とデートとかしなくていいの？」

と、あくまでも維織に彼女がいる、という前提で話を振った。

その問いの答えで、少なくとも彼女の有無が分かるし、関係性も覗けると思ったからだ。

平静を装って返事を待つ結人の耳に届いたのは、

「デートとか、しないかなあ。そもそも、彼女がいないしね」

という、結人にとっては非常に安心できる言葉だった。

もちろん、嘘をついている可能性もあるのだが、結人に対して嘘をつく必要もないだろうから、信じることにした。

「結は？ 彼女とかいないの？」

今度は維織が聞いてきた。

「いないよ」

即答する結人に、

「仲のいい女の子は？」

「それもいない」

「そうなんだ？ あの尚にもいるのに」

不思議そうに維織は言った。

「尚くんは背が高いから」

「そこが問題なの？」

「わかんないけど。クラスの女子には俺より背の高い子もいるし」

結人の言葉に、維織はふわりと笑った。

「そういえば、結はいつの間にか『俺』って言うようになったね。前は『僕』だったのに」

その指摘に、結人はどう説明しようか迷う。

迷うというかそのままを話せばいいと思うが、話し方によっては拗ねているように思われそう
というか、小さいことで悩んでるなと思われてしまう気もした。

でも、変に取り繕っても維織には見透かされそうな気がした。

「中学入ってすぐの頃なんだけど、クラスの女の子が別のクラスの子たちと話してるの聞いちゃ
って」

「なんて？」

「自分のことを『僕』呼びしてる男子って、子供っぽい、みたいな。なんか、馬鹿にしてるみたい
なそんな感じの言い方してて、その時は俺も『僕』って言ってたし、背も今より小さかった
し、なんか、それで」

「そうなんだ？ でも僕は自分のこと、ずっと『僕』って呼んでるけどなあ」

少し首を傾げて維織は言う。

「維織ちゃんは、背も高いし、格好いいから『僕』って言ってても、問題ないっていうか」

今の言い方、拗ねてるっていうか、卑屈に聞こえなかったかなと結人は心配したが、

「結は僕のこと『格好いい』って思うんだ？」

維織はそんな、当たり前とも言えるようなことを聞いてきた。

「思うよ。だって維織ちゃん格好いいもん。世界基準で格好いいと思う」

「世界基準なんだ？」

「うん」

「嬉しいなあ。でも、僕は結に一番格好いいって思ってもらえたらそれでいいかな」

さっきと同じようにふわりと笑って、維織は言う。

そんな維織の言葉と表情に結人の心臓が、ドキッと跳ねた。

「一番格好いいよ」

ずっと、結人の中でいろんなこと一番は維織だ。

優しくて、頭がよくて、格好よくて、王子様みたいだと思った子供の頃の印象は、今になっても全く変わらない。

だから余計に、結人の中で維織への「好き」という感情はずんずん降り積もって、もしリアルに高さを測れるなら自分の身長をとうに超えていると思う。

でも、それを維織に言えるわけもない。

言ってしまったら、全部が終わる。

今までの優しい思い出も、何もかもがけし飛ぶ終わりになる。

——だから、秘密。

胸の中で、結人は呟き、ホームに入ってきた電車に尚頼と一緒に乗りこんだ。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>